

### すべての人に対してすべてのものになり

現代社会の人間関係について話をする時、何より強調されるのは「共感」です。一般的に共感とは他人の状況や気持ちを感じられる能力のことでしょう。この共感の能力は社会生活のためだけでなく、信仰生活にもとても重要です。それは、信徒たちの間に人間関係があるからだけでなく、信仰生活が神様との共感を通して成り立つものであるからです。今日一緒に読んだ聖書日課はこのような共感の大切さを示しています。

まず今日一緒に読んだ福音書を見てみましょう。福音書には、イエス様がペトロのしゅうとめと多くの人々を癒してくださる場面が記されています。けれども、あまりにも短いメッセージで理解し難いです。ペトロのしゅうとめの癒しの出来事もただ「イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り」（マルコ1:31）と記されているだけです。癒しができたのは、イエス様の特別な癒しの力があつたからでしょう。けれども、もう一方では、「共感があつたから」なのです。

それでは、どのような共感があつたのでしょうか。それを理解するためには、まず、ペトロのしゅうとめがなぜペトロの家に行ったのかについて注目する必要があります。イスラエル社会でしゅうとめが婿の家で暮らすのは珍しいことです。夫が亡くなったら普通は息子に頼ります。それゆえ、ペトロのしゅうとめは夫が早く亡くなっただけでなく、息子もいなかったようです。それゆえしゅうとめはペトロのところでお世話になっていたのです。ところでペトロにとってどんな事があつたのでしょうか。ペトロは、イエス様の「わたしについて来なさい」（マルコ1:17）という一言によって、「すぐに網を捨てて従いました」（マルコ1:18）。生業をあきらめて弟子になったということです。それなら家族はどうやって生活をしていたのでしょうか。ペトロの家族はきっと経済的に厳しい状況になっていたに違いありません。しかししゅうとめはペトロに一言も言えません。ペトロにお世話になっているからです。さて、このようにペトロが生業をあきらめて、家族の生活が苦しくなったのは誰のせいでしょうか。それはイエス様のせいでしょう。それゆえ、しゅうとめはイエス様を非常に恨んでいたはずですが、その恨んでいたイエス様が、ペトロの家に来られたのです。きっとしゅうとめとしては我慢することができなかつたでしょう。だからしゅうとめは熱を出して寝込んでしまったのかもしれない。

けれども、イエス様はこのような事情をご存知だったようです。共感なされたのです。ですからイエス様は「(しゅうとめの)そばに行き、手を取った」（マルコ1:31）のです。

そばに行き、手を取る過程を通して、間違いなくイエス様の心がしゅうとめに伝わったでしょう。そしてしゅうとめの心もその手を通してイエス様に伝わったのでしょう。

ところで、ここでもう一つの重要な場面があります。それは、「(イエス様がしゅうとめを)起こされた」(マルコ1:31)ということです。「起きる」という単語は、私が皆さんに何度も申し上げましたように「復活する」と同じ単語です。ですから、イエス様が手を取って、しゅうとめを「生まれ変わらせた」ということです。イエス様としゅうとめの間には、一言の言葉もありません。けれども、心を通して深い共感がイエス様としゅうとめの間にできたのです。そのためしゅうとめは新たに生まれ変わることができたのです。聖書には、「しゅうとめは弟子たちをもてなした」(マルコ1:31)と記されています。熱を出して寝ていた人が治ったからといって、すぐにお客さんをもてなすなんていうことは無理でしょう。けれどもしゅうとめが生まれかわったからこそできることです。

その後、イエス様は多くの病人を治し、悪霊を追い出しました。この時、イエス様は「悪霊にものを言うことをお許しになりませんでした」(マルコ1:34)。沈黙させたのです。それは、悪霊の言う空しい言葉は心を乱し、混乱させて共感に妨げるものになるからです。

今日ご一緒に読んだ旧約聖書に出てくるエリシャの癒しの出来事はとても長いストーリーなので、普段の礼拝の中では短くして読みます。けれども今日はすべてお読みになることをお勧めいたします。信仰的な共感が起こり、その共感によって子供を生かしてくれるお話であるからです。

シュネムの婦人は、あちこち歩き回りながら宣教活動をしていたエリシャに休ませるための部屋が必要であると思いました。エリシャの気持ちに共感したのです。それでエリシャに部屋を提供しました。エリシャはこの歓待に報いとして男の子に恵まれるように祝福しました。男の子を切に望みながらも言えずにいたシュネムの婦人の心に共感したのでしょう。ところが、ある日、その男の子が死んでしまいました。その時のシュネムの婦人の心はどうだったでしょう。子どもを亡くした女性には身振り一つ、言葉一つにも悲しみが現れます。エリシャは遠くからシュネムの婦人が自分のところに来ているの見て、「彼女がひどく苦しんでいる」(1列王4:27)ことが分かりました。共感したのです。そこで従者ゲハジに、「すぐに走って行って彼女を迎えなさい」(1列王4:25)と言いました。男の子の癒しの過程も共感そのものです。聖書にはこのように記されています。

「(エリシャは)子供の上に伏し、自分の口を子供の口に、目を子供の目に、手を子供の手に重ねてかがみ込む。」(1列王4:34)

エリシャは共感を通して、シュネムの婦人の息子を生き返らせたのです。

特に今日ご一緒に読んだコリント書には、使徒パウロが共感するためにどれほど努力し

たかが記されています。パウロはこう言いました。

「わたしは、だれに対しても自由な者ですが、すべての人の奴隷になりました。できるだけ多くの人を得るためです。」(1コリント9:19)

そして、「ユダヤ人に対しては、ユダヤ人のようになり、…律法に支配されている人に対しては、…律法に支配されている人のようになり、…弱い人に対しては、弱い人のようになりました。」(1コリント9:20-22)とも言いました。相手に共感できるように、相手と同じ境遇になったということです。パウロは共感のために食べること、着ること、行動することなどすべてを相手と同じ境遇になってやったのです。これについて私の大学院時代の先生はこのようなたとえを用いて教えてくださいました。

「雨に降られている友達のために傘を差してあげることより、一緒に雨に降られて、一緒に歩いていくことが、もっと大きな慰めと力になります。」

イエス様がこの世に来られたのもまさにこれと同じでしょう。イエス様は、人になってこの世に来られ、私たちとともに、私たちのように苦しみを受け、涙を流しながら生きておられたから、誰よりも私たちの境遇をよく理解し、私たちを救いの道に導いてくださることができるのです。したがって、わたしたちもこのようなイエス様の「受肉」の心を学んだら、共感の能力を高めることができるでしょう。

今日ご一緒に読んだ福音書には、もうちょっと具体的に共感の能力を高められる方法が記されています。それは、共感の奇跡を行われた後のイエス様のなさったことです。今日ご一緒に読んだ福音書にはこのように記されています。

「朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。」(マルコ1:35)

これは、「イエス様がリトリートを通して霊的な力を得られた」という意味です。ところでもう一方では、「リトリートは共感の能力を高めるのに大きく役に立つ」ということも示しています。リトリートを通して神様と深く共感できるし、このような共感是他の人を理解するのに大きく役立つからです。ですから、共感の能力を高めようとするれば、イエス様のように喜んでリトリートをするようにお勧めいたします。

けれども、コロナ禍によって自粛生活を過ごしているところに、リトリートのお勧めなんてふさわしくないとおっしゃる方もおられるかもしれません。しかし、コロナ禍によって自粛しながら過ごす時間をリトリートのように思って(事実、リトリートという英語には避難生活という意味もあります)、一人でお祈りを続けていけば、まさにそれがリトリートになるのではないのでしょうか。そしてコロナ禍によって信徒たちとの出会いが遠ざかっている状況にも、神様との共感を通してどうやって他の人に共感できるのかを考え、祈り

続ければ、間違いなく大きな恵みを得られるでしょう。使徒パウロは、「すべての人に対してすべてのものになりました。何とかして何人かでも救うためです。」(1コリント9:22)と告白しました。

この一週、神様との共感を通して神様の豊かな恵みをいただき、その恵みの分かち合いを通して救いの喜びをともに過ごすことができるように心からお祈りいたします。